

奈良吉と奈良丸

□浪曲・浪花節のはなし

な
ら
民
俗
通
信

□271□

西村 博美

事となり、愛浪家をして此の日を折り数へて待兼ねしむる奈良名物の一つとまで進んで来た」と森口奈良吉は記す(同上書)。

昭和三年一月三十一日

の「浪曲奉納祭」と春野百合子については、もう一冊の雑誌に詳しい。

▼春野百合子

▼二冊の古雑誌から奈良吉は、奈良の春日大社などで神職を務めた森口奈良吉(一八七五~一九六六年)。一方、奈良丸は、一世を風靡(ふうび)した浪曲師の吉田奈良丸のことである。

先日、森口藏書を整理するなかにあつた二冊の雑誌から、当時の「浪曲事情」ともいえる一端を垣間見ることにしたい。

森口奈良吉が、奈良丸(二代目、後の大和之丞)一八七九~一九六七年)に初めて出会つたのは、明治四十一(一九〇八年三月、奈良県公会堂で行われた地元紙(新大和新聞)の五千号記念祝賀会の席であつたとしている。

森口は「盤上玉を転ばす美声……」と書いてい

るから、奈良丸はその祝

いの会に一席を演じたのである(『奈良丸』、奈良丸会本部、昭和五年)。その後しばらくを経て、森口は大正十五



創刊 奈良丸

森口奈良吉が感想を寄せた奈良丸会本部が発行した雑誌

年中行事に浪曲奉納祭

源蔵」を物語り、続けて昭和三(一九二八年)、

三代目は浪曲奉納祭に「勧進帳」を春日神社(当時)に奉じている。

以来、この奉納祭は「毎年引き続き行はれて来、今や当社の年中行

百合子」、誠成社、昭和五年)。

森口は、「(土田は)

多年古事記の研究に没頭

し重要神蹟を盡く画帳に

描写せる斯道の奇人な

り、翁は又予と志を同う

せざるを以て……来社して

百百合子、誠成社、昭和五年)。

森口は、「(土田は)

多年古事記の研究に没頭

し重要神蹟を盡く画帳に

描写せる斯道の奇人な

雲石衛門や奈良丸調は、阪。百合子の得意とする良丸君の偉大な存在を近づけるに期待するものである。望むらくは大衆によつて今日に伸びたる浪曲をして更に燐然たる光

を大衆の前に放つ日を、恵まれた天分をもつ吾

宮司やまわりを説得し

て奈良丸、百合子を春日

社に呼んで「浪曲奉納式

なるものを企図したの

は、当時春日社の櫛宣(ねぎ)であつた森口奈

良吉によるものであったと思われるが、ひょつと

ようには浪曲を聴いていたのとは思えない。

一方で、「私は異友奈良丸君の偉大な存在を近づけるに期待するものである。望むらくは大衆によつて今日に伸びたる浪

曲をして更に燐然たる光

を大衆の前に放つ日を、

恵まれた天分をもつ吾

奈良丸君に(吉本興業社

主、林正之助)」。

「浪花節は一種の物語である。この物語がクラ

イマックスに達した時が、即ち節となつて現れるのである。……僕は奈

良丸の進んでゐる道を静かにみてゐる(作家、佐

之を語ることを楽しむ」と記しており、また「奉納祭」と同月十日の大阪天満国光席で土田とともに春野百合子(初代)に春野百合子(初代)の浪曲を聞いていることが分かる(同上書)。

さく、奈良丸(二代)と記しており、また百合子の父は、一枚嘲(か)んでいたのいずれも祭文(さいもん)かかもしれないとは、筆者(西村)の勝手な推測にすぎない。

▼大衆の芸能

ところで森口は、同上

書に「從來の武士道鼓吹

に遡り民衆娛樂の中に我

建国の大精神を明にして……」と、これ以上な

達しており、姉婿(むこ)

が浪曲家であつたことが

とは、森口がかねてから

懇意としていた(『春野

百合子』)といふこと

とはい、森口のいう

「民衆」の多くは、その

山在の水木要太郎(奈良

女高師教授)なる粹人が、

一枚嘲(か)んでいたの

いづれも祭文(さいもん)

語りであつたらしい。

「祭文」とは、折口信夫

によれば(①江戸の伝承

文芸として淨瑠璃・説教

・祭文・念佛の四つがあ

る。②そのうちの祭文が、

今の浪花節の基礎になつ

ていて。③修驗道の山伏

が祭文(「いはひ詞」)

を唱えながら家の門に立つて物乞いをする。④そ

のうち、「おどけ」に富み、明るく浮き立つよう

な内容をもつ「ちょぼく

れ」や「あほだら經」などに転じて、山伏の手から、祭文語りの側に移つたのだろう(「日本芸能史六講」他)とされる。他にも小沢昭一が『私たの芸能野史』(新潮文庫)で奈良市寺町にいた広沢瓢右卫門が奈良丸について、触れているところを、ここに引きたかったが紙数が尽きた。(にしむら・ひろみ詩人、奈良民俗文化研究所研究員)

△ 次回は3月2日掲載